

〈その他〉

若手教員の大学教育における教育者としての基礎知識の習得を目指す ファカルティ・ディベロップメント (FD) プログラム

A faculty development program aimed at acquiring basic knowledge regarding educational activities
as a university junior faculty members

阿部恭子¹ 渡邊章子¹ 伊能美和¹ 宮本千津子¹

1 東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

Kyoko ABE¹, Akiko WATANABE¹, Miwa INO¹, Chizuko MIYAMOTO¹

1 Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要 旨：2021年度から若手教員を対象に大学教育に関する基礎知識の習得をはかるためのファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development : FD) プログラムを実施した。参加した若手教員の取り組みや学びと FD プログラムの成果について報告する。FD プログラムの内容は、授業設計と講義法に関するオンデマンドの FD 動画教材の視聴と授業参観および授業実施、ワークショップとした。FD プログラムには、13人が参加し、FD 動画は全員が視聴した。授業参観は10人(76.9%)が行い、授業実施は12人(92.3%)が行っていた。ワークショップは、全教員を対象とする2021年度春季FD研修会と、若手教員を対象とする2022年度交流会、2023年度交流会を開催した。交流会では、動画視聴や授業参観での学びと授業設計や授業実施での悩みを共有した。これらの共有を通じて、若手教員は、共感関係を構築し、参観授業の選定に関する具体的な情報を得て、問題解決のための具体的な方略を考えることができた。若手教員を対象とするFDプログラムは、若手教員が大学教育に関する基本的な知識を習得することを容易にし、ピアサポートを得る機会を提供した。

Abstract: We report on a faculty development (FD) program, which provide with basic knowledge about university education for junior faculty members (assistant professors and assistant), conducted since 2021, and its outcomes. The FD program consisted of 1) watching on-demand FD video materials on lecture design and methods, 2) Observation of lectures by other teachers, 3) lectures implementation and 4) workshops. Thirteen junior faculty members participated in the program and all watched the FD video. Ten (76.9%) observed other teacher's lectures and 12 (92.3%) conducted lectures. Workshops were held at the spring FD workshop in 2021 for all teachers, and at the exchange meetings in 2022 and 2023 for junior faculty members. During the exchange meeting, the participants shared their learning from watching the FD video and lectures' observation, as well as their concerns about lecture design and implementation. Through these shared experiences, junior faculty members were able to develop an empathetic relationship, obtain specific information regarding the selection of classes to visit, and develop specific strategies for solving problems. The FD program facilitated the acquisition of basic knowledge about university education for junior faculty members and provided an opportunity to gain peer support.

キーワード：大学教育、若手教員、Faculty Development

Keywords：university education , junior faculty members , faculty development

I . はじめに

大学におけるファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development : 以下FD) の実施は、2007年の大学院および大学設置基準の見直しに伴い義務化された¹⁾。本学部では、初年度からFD委員会を設置して、FD活動を行ってきた²⁾。2021年度は、学部開設から4年目の完成年度となり、助教・助手の職位にある教員が授業を実施する科目が増えると考えられるため、FD活動に取り組むこととした。看護系大学の若手教員を対象とする研究では、教育に関する知識の不足という困難を有していること³⁾、授業設計や授業内容・教育方法に関する教育実践能力が必要であると認識していること⁴⁾、が報告されている。看護系大学での若手教員は、臨床での看護業務に従事していた者や、看護専門学校や他の看護系大学での教育活動に従事していた者など、さまざまな背景を有しており、授業運営のための知識の獲得や能力の向上の支援を求めていると考えられた。

大学教員向けのFDマップと利用ガイドライン⁵⁾では、新任教員の目標には、授業計画の作成方法の理解と実施、授業実施の基本的スキルの理解と実施が含まれており、授業の計画・実施は、教育者としての基礎的知識として必須であるといえる。そこで、2021年11月から、授業計画の作成方法の理解、授業実施の基本的スキルの理解と実施を目指して、助教・助手を対象とする、「若手教員の大学教育における教育者としての基礎知識の習得のためのFDプログラム (以下、FDプログラム)」を開始した。本稿では、FDプログラムの参加者の取り組みや学びとFDプログラムの成果について報告する。

II . FDプログラムの概要

1. 名称：

「若手教員の大学教育における教育者としての基礎知識の習得のためのFDプログラム」

2. 目的：

FDプログラムを通して、若手教員が授業計画の作成方法や授業実施の基本的スキルを理解し、大学教育

に関する基礎知識を習得できる。

3. 実施期間：2021年11月～2024年3月

4. 対象：助教・助手の職位にある教員 (以下、若手教員)

5. 参加者：

本FDプログラムの参加者は13人で、2021年11月時点で在職していた若手教員のうち2024年3月時点で在職していたのは7人 (以下、2021年度若手教員)、2022年4月以降に着任し2024年3月時点で在職していたのは6人 (以下、2022年度若手教員) であった。

6. 周知方法：

FDプログラムのリーフレットを作成し、メールで対象となる若手教員に通知した。2021年度若手教員には、FDプログラムのリーフレットが完成した2021年11月に通知した。2022年度若手教員には、着任直後の情報過多による負荷を避けるために2022年5月に通知した。

III . FDプログラムの実施方法

大学教員向けのFDマップと利用ガイドライン⁵⁾では、FDの実施方法として、ワークショップ、授業公開プログラム、メディア学習 (eラーニング、ビデオ・DVD学習) などが示されている。そこで、このFDプログラムの実施方法は、「動画視聴」「授業参観」「授業実施」「ワークショップ」の4つで構成することとした。

まず、動画視聴で授業設計や講義法の知識を深め、授業参観によって授業設計や展開方法の実際を学び、自ら授業実施を行い、さらに、ワークショップにおいて学びの共有を図った。2021年度からの3年間の流れを図1に示す。

1. 動画視聴

授業設計と講義法に関して、以下の①～⑥の6つのFD教材⁶⁾を選定した。これらは、使用許諾不要であることを確認した。

① 授業設計：シラバスってどんな役割があるの？ (約

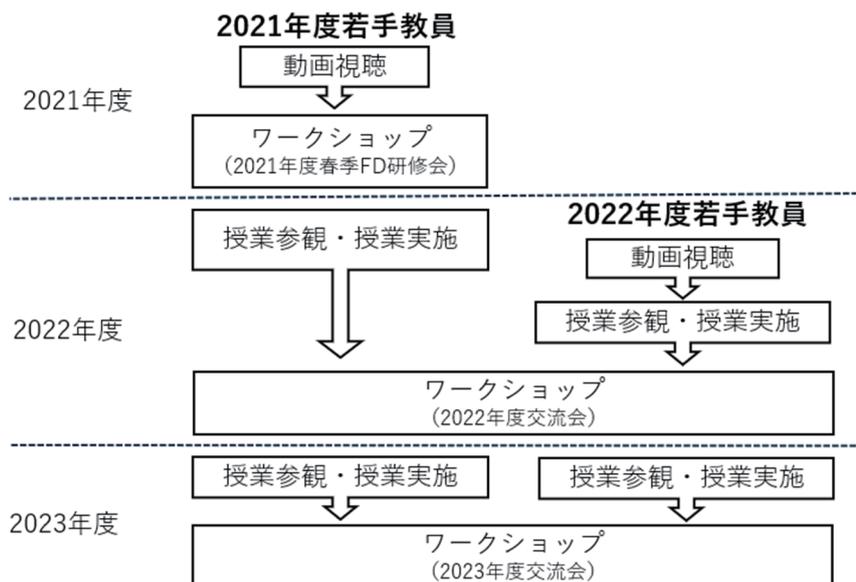


図1 大学教育における教育者としての基礎知識の習得のためのFDプログラム

9分)

- ② 授業設計:授業って何から設計するの? (約13分)
- ③ 授業設計:授業のスケジュールはどうやって決めたらいい? (約9分)
- ④ 授業設計:授業を改善するためには? (約5分)
- ⑤ 講義法:講義法は時代遅れか? (約13分)
- ⑥ 講義法:学生が寝ない授業をするためには? (約8分)

動画視聴は、FDプログラムのメール通知から6か月程度で視聴を終了するようにした。動画視聴においては、次のFDプログラムである授業参観の目的や、授業実施時の到達目標について、各自保管で、課題のレポートをまとめておく設計とした。

2. 授業参観

本学部では、初年度より全教員に対して原則としてすべての授業を見学可能としている。本FDプログラムでは、若手教員が見学希望する授業の選定にあたり、若手教員が所属する領域の領域責任者に相談して授業の特徴などの情報を得るようにした。授業参観にあたっては、若手教員から授業担当教員に連絡をとり見学の目的を説明した。授業参観後は、授業設計や展開方法についての質問や感想などの意見交換を行うこととした。

3. 授業実施

若手教員は、科目責任者の指導のもとで授業設計を行い、授業実施に取り組むこととした。

4. ワークショップ

本FDプログラムにおけるワークショップは、「2021年度春季FD研修会」「2022年度交流会」「2023年度交流会」の3つを開催した。

1) 2021年度春季FD研修会

2022年3月に、学部全教員を対象とするFD活動である春季FD研修会として、「看護大学教育における教育者としての必要な基礎知識を考える～「授業設計」「講義の方法」を中心に～」を開催した。

若手教員は、動画視聴により標準的な授業設計や講義法の知識は得られるが、本学の「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー: Diploma Policy :DP)」、「教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー: Curriculum Policy :CP)」、「入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー: Admission Policy :AP)」の3つのポリシーを踏まえて、どのような授業を設計していくことが求められるのか、また、そのために本学の学生の特徴やレディネスをどのように反映するのかといった重要な視点を取り入れることは難しい。そこで、千葉看護学部の全教員を対象とするFD活動である春季FD研修会において、教員同士の対話を通して、若手教員が本学に求められる授業設計や講義実施のためのアイデアの創出ができることを目的とするワールドカフェ方式のワークショップを開催した。1グループあたり5-6名の構成で、テーマは、「学習意欲が高まる到達目標の設定とは」「学生の集中を途切れさせない授業設計とは」「事前事後課題やレスポンスシートの活かし方とは」、などとした。終了

後は、「成果共有レポート」を提出してもらい、取りまとめたものは配布した。

2) 2022年度交流会

2023年3月に、2021年度若手教員と2022年度若手教員を対象に対面にて開催した。時間は90分とした。意見交換を行いやすいように口の字で机を配置して参加者が着席し、FD委員が司会を行った。参加者全員が動画視聴の学びや授業参観の取り組みについて発表したのち、意見交換を行った。終了後は、「成果共有レポート」を提出してもらい、取りまとめたものは配布した。

3) 2023年度交流会

2024年3月に、2021年度若手教員と2022年度若手教員を対象に開催した。開催形式と時間は2022年度交流会と同様であった。参加者全員が、授業参観の学びと授業実施の状況について発表し意見交換を行った。終了後は、「成果共有レポート」を提出してもらい、取りまとめたものは配布した。

IV. 若手教員のFDプログラムの 取り組みと学び

1. 2021年度のFDプログラムの取り組みと学び

2021年度若手教員は、2021年11月から動画視聴に取り組んだ。そして、2021年度春季FD研修会に参加した。成果共有レポートでは、「授業の目標は、簡単に達成できるものではなく、ジャンプすれば届くレベルに設定すること、そして、具体的に記載し、評価可能な目標とする必要があることを改めて学ぶことができた」「講義はインプットだけでなく、双方向性を意識しながらアウトプットできるような問いかけを行ったり、事後課題を提示していきたい」などの学びを得ていた。

その後、FD委員会から、動画視聴の進捗と授業参観の準備状況を把握する目的で、動画視聴の有無、動画視聴の感想、授業参観を希望する科目、授業参観で学びたい技術や能力について自由記述によるアンケートを実施した。動画視聴は、全員が視聴を終えていた。「内容が理解しやすかった」「大学の授業設計についての知識を整理することができた」などの感想があった。授業参観を希望する科目として、「シミュレーション学修を取り入れている科目」「母性看護学領域のTBL (Team Based Learning) を取り入れた科目」「アクティブ・ラーニングを取り入れている講義」「グループワークやICT (Information and Communication Technology) を取り入れている科目」「LMS (Learning Management System, 日本データパシフィック株式会社, WebClass[®]) での掲示板等の機能活用や、web会議

サービス (Zoomビデオコミュニケーションズ, Zoom[®]) 等でのチャット・投票機能を活用している授業」「技術演習の科目」などの回答があった。授業参観で学びたい技術や能力は、「学生が主体的に学べる仕掛け作りのコツ」「学習意欲を高める教員のかかわり方」「学生を引き付ける工夫や授業展開」「学生との双方向性を確保する工夫」などがあり、2021年度春季FD研修会でのワークショップにおいて、教員相互の交流によって授業科目の内容や教員が実際に行っている授業展開の工夫の情報を得て、授業参観の目的を具体的に捉えていた。

2. 2022年度のFDプログラムの取り組みと学び

2021年度教員は、授業参観と授業実施に取り組んだ。2022年度若手教員は、5月から動画視聴を開始し10月から授業参観と授業実施に取り組んだ。

2022年度交流会では、2021年度若手教員が授業参観の科目の選び方や授業参観の学びを発表した。授業を実施した若手教員は、動画や授業参観をみて授業設計や講義法を工夫していることを発表していた。2022年度若手教員は、動画視聴の学びや授業参観に向けての準備状況を発表した。意見交換では、授業参観の科目の特徴の情報が共有されていた。

終了後の成果共有レポートは、動画視聴では、「同じ動画を見ても気づきのポイントが様々あり、他の参加者の発表によって自分が気づいていない点を確認することができ、理解が深まった」「視聴した内容を授業改善に活かしているという発表を聞き、自分ひとりでの学びよりも、さらに視野・学びが広がった」「動画を視聴して授業設計の点検をしていると聞き、活用方法の視野が広がった」などがあった。授業参観では、「ルーブリック評価方法を知ることができた」などがあった。授業参観への取り組み方については、「見学する授業の選定は、担当授業との関連や授業方法だけではなく、学生の授業評価も参考にできるとわかった」「事前に見学を依頼することが不安で参観を躊躇していたが、直前の連絡でも見学可能とわかりハードルが下がった気がする」などがあった。授業実施では、「ほかの領域の授業参観をしたので、自分が授業をおこなう時に、他の領域との授業の関係も話すことができるようになり、学生の理解が深まっていると思う」「教育方法について学んだ経験はあるが、我流の教育方法になっている可能性に気づくことができた」などがあった。

交流会での相互交流について、「交流会で参加者の意見を聞いたり、意見の交換を行うことにより、自分自身の課題が見えた」「授業設計で悩んでいるが、他

の教員も同様であり少し安心した」「同じような立場で、授業をする際に悩んでいることを共有でき、励みになった」「COVID-19感染拡大予防のために全員で集まる機会がなくなっていたが、このような機会ですべて交流できてよかった」「同じ職位だからこそ、困っていることを気軽に相談できるよい機会となった」「定期的にこのような交流会が開催されると、より横のつながりが強くなると思う」「授業や仕事の悩みや困ることはたくさんあるので、気兼ねなく相談や情報交換ができる場があるととても有意義だと思う」などがあった。

困ったことや改善が望ましいことは、「スケジュールリングが難しかった」「スケジュールが合わず、希望する科目の授業参観ができなかった」「本プログラムの目標が分からなかったので、どんな授業を選べばよいか、どんな視点で授業参観をしたらよいか悩んだが、自分の目標・目的に応じて自分の授業実施に生かせればよいということが分かった」「若手教員同士で授業を見ることができるような仕組みがあるとよい」などがあった。

3. 2023年度のFDプログラムの取り組みと学び

2021年度教員・2022年度若手教員の全員が授業参観と授業実施に取り組み、その学びを2023年度交流会で発表した。終了後の成果共有レポートでは、「ポイントを明確にして、学生が目標を達成できる発問が重要だと改めてわかった」「さまざまな授業形態で授業が行われていることがわかり視野が広がった」「臨床での事例を織り交ぜて講義を進めると学生の注意を引くことができるというのは、自分自身も感じていたことでしたが、他の先生方も同様の経験をしており有用な方法であると改めて感じた」「自分自身の授業設計や運営を再検討する機会となった」「様々な授業形態の授業参観の発表があり、学んだり考えたりしたことを共有できた。次年度の授業に生かしていきたい」などがあった。

困ったことや改善が望ましいことでは、「同じ職位の教員の授業参観やピアレビューがあるとよい」「参加者の経験によって話す内容が異なるので、似たような経験の教員とのグループワークができると、悩みを話しやすいと思う」「学部の科目だけでなく、大学院や実習指導者講習会なども授業参観の対象範囲とすれば、看護学以外の授業を参観する機会が増えると思う」「他大学のFD研修や授業方法に関する研修の情報があるとよい」などがあった。

4. 2021年度～2023年度全体のFDプログラムの取り組みと成果

2023年度交流会終了後に、2021年度教員・2022年度若手教員13名に、動画視聴や授業参観、授業実施の回数についてアンケートを行った。

動画視聴は、13人全員が視聴していた。授業参観は、10人(76.9%)が実施しており、0回が3人、1回が6人、2回が3人、3回が1人で、平均1.5回であった。実施時期は、2022年度が5回、2023年度が10回であった。授業実施は、12人(92.3%)が行っていた。授業実施の有無のみを尋ねたため、詳細な内容や回数、時期はわからなかった。

V. 考察

1. 大学教育に関する基礎知識の習得をはかるためのFDプログラムの成果

本FDプログラムでは、助教・助手の職位にある教員の大学教育に関する基礎知識の習得を図る目的で、webサイト上で公開されているFD教材の動画視聴および授業参観、授業実施、ワークショップを実施した。

動画視聴は、13人全員が実施しており、大学での授業設計や教育方法・教育評価の理解を深めていた。オンデマンドでのFD教材の動画視聴は、日々の教育・研究活動の合間でFD活動の時間を調整することが可能であり取り組みやすかったと考えられる。また、教育活動の経験を有する教員は、動画に沿って授業設計の点検・評価を行っていた。FD教材の具体的な応用について、交流会の場で共有できたことは有意義であったといえる。

教学マネジメント指針⁷⁾では、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持ち、専門知識を社会で活用していくコミュニケーション能力を備えた人材を育成するためには、能動的学習(アクティブ・ラーニング)の活用を指摘している。また、情報通信技術(ICT)を活用した手法により多様な学修形態を促進し、「考える」「話す」「行動する」などの学びの工夫が求められている。参加した教員は、動画視聴により、アクティブ・ラーニングやICTを活用した教育方法とその必要性の理解を深めており、授業参観では、アクティブ・ラーニングやICTを活用した授業形態への関心が高かった。

さらに、授業参観で学びたい技術や能力は、学生の主体的な学びや学習意欲を高める教員のかかわり方などがあった。授業参観を行った教員は、担当教員の発問の仕方や授業形態の工夫の実際を学ぶことができていた。川口ら⁸⁾は、授業を見学する教員は、学生が

授業で集中している場面、授業における時間配分、授業の展開、構成、内容、学生へのレスポンス、学生の学習状況、実習との関連といったことに着目していることを明らかにしている。今後は、このような授業参観の視点について、計画的に取り組むよう促すことでより有意義な見学が可能となると考える。

授業参観の科目の選定では、領域責任者の支援を得て積極的に取り組む教員がいる一方で、参観を依頼することへの不安を抱く教員や、科目の選定に悩む教員もいた。交流会での意見交換では、科目の選定の仕方や依頼方法の情報を共有することができていた。

交流会では、動画視聴や授業参観での学びや授業設計や授業実施での悩みを共有した。これらの共有を通して、共感的な関係性を築くとともに、課題解決に向けての具体策を考えることができていた。また、同じ職位だからこそ相談できる機会となったという感想もあり、ピアサポートによる支援を得る場となった。

本FDプログラムを通じて、他領域と授業の関係の説明することが可能となり学生の理解を深めていることや、教育方法を振り返り基本に立ち戻ることの重要性に気づく教員もいた。

2. 大学教育に関する基礎知識の習得をはかるための FDプログラムの課題

参加した若手教員から、授業参観の科目選定が難しかったという意見があったことから、シラバスに授業形態や授業の特徴を具体的に記載する必要があると考える。また、FDプログラムの目的への戸惑いやスケジュールリングに難渋する教員もいたことから、FD委員や領域責任者から取り組みへの支援が望ましい。さらに、参加者の経験に応じた学修内容や授業参観、およびグループワークの実施方法などのプログラムを検討する必要がある。今回は、授業実施の具体的な内容や、事後課題レポートの作成状況については、心理的安全性を鑑みアンケートには含めなかった。そのため、取り組みの状況を把握していないが、心理的安全性を確保しつつどのように取り組みを評価していくか、検討の余地があると考ええる。

3. 大学教育に関する基礎知識の習得をはかるための FDプログラムのあり方

本FDプログラムでは、2021年度若手教員と2022年度若手教員が参加し、各自が動画視聴および授業参観、授業実施に取り組んだ。交流会で、動画視聴や授業参観の学びを共有することによって、新たな発見や視野の広がりを実感していた。ワークショップとは、集団で新しいアイデアを創り出す活動を通して学ぶ特徴

がある⁹⁾。交流会において、参加者がともに学びあう環境を提供することで、新しいアイデアを作り出し、互いの教育観の醸成が促進され、大学教育に関する基礎知識の習得を促進するのに有用であったと考えられる。

VI. 結論

2021年度から2023年度まで、オンデマンドによるFD教材の動画視聴および授業参観、授業実施、ワークショップから構成されたFDプログラムを実施した。FD動画は、13人全員が視聴し、授業参観は10人(76.9%)が行い、授業実施は12人(92.3%)が行っていた。ワークショップでは、動画視聴や授業参観での学びと授業設計や授業実施での悩みを共有した。これらの共有を通じて、若手教員は、共感関係を構築し、参観授業の選定に関する具体的な情報を得て、問題解決のための具体的な方略を考えることができた。

本FDプログラムは、大学教育に関する基礎知識の習得を促進するとともに、ピアサポートによる支援を提供する機会を提供した。

引用文献

- 1) 文部科学省.大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について(通知). 2007. https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103.htm (参照2024年7月15日)
- 2) 加藤星花,平田美和,齋藤尚子,足立奈穂,田所由利子,八楯類子,吉田澄恵.「広いフィールド観」を持つ学生を育てるための取り組み—集中FD研修会の成果—. 東京医療保健大学紀要 2020: 14(1): 179–183.
- 3) 大河内敦子, 榎恵子, 三村洋美. 看護系大学で精神看護学を担当する若手教員の教育実践力支援に関する検討～若手教員の教育活動における困難と求めている支援に焦点を当てて～. 昭和学士会誌 2022:82(3):205–224.
- 4) 中川名帆子,山内豊明,小西雅人. 新任看護系大学教員に必要な教育実践能力に関する質的研究. 岐阜成徳学園大学看護学研究誌 2019: 4: 1-13.
- 5) 国立教育政策研究所 FDer研究会. 大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン.2009. https://www.nier.go.jp/koutou/projects/fder/fdmap_ver9.pdf (参照2024年7月15日)
- 6) 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部作

- 成.ドラマFD教材「シリーズ 大学の授業を極める」eラーニング教材、教育支援コンテンツ.https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/support_e-learning/2021/04/gakushatei.html (参照2024年7月15日)
- 7) 中央教育審議会大学分科会. 教学マネジメント指針. 2020.
https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt_daigakuc03-000004749_001r.pdf (参照2024年7月15日)
- 8) 川口恭子,河野益美,甘佐京子. 2019年度人間看護学部FD委員会による授業参観の取り組みについて. 人間看護学研究 2021 : 19 : 65-70.
- 9) 安齋勇樹,ワークショップを企画する. 於 ; 山内祐平,森玲奈,安齋勇樹著.ワークショップデザイン論, 東京 : 慶応義塾大学出版会 2013; 41-99.